

# 太陽黒点について

## 電波伝搬の重大要素

アマチュア無線の電波伝搬にとって自然の変化、とくに太陽黒点の変化ほど重要なものはありません。1.8～50MHzまでの周波数は大いにその影響を受けます。

戦争中、筆者は中学生であったため、太陽黒点に関してそれほどの知識がありませんでしたが、その影響がこんなにも凄いものなのか、と感じたのは、戦後数年たってからのことでした。そして、そのころ、CQ ham radio誌を作ることになってDXのページ(今のDX World)の執筆を当時の大河内理事長から依頼され、創刊号と2、3号を担当しました。

時期は、サイクル18で、太陽黒点は100近くあり28MHzは2MHz幅のバンドいっぱいにAM(A3: 電話)モードでQSOする米国などの局でぎっしりと詰まっていました(日本のアマチュア無線再開前)。そのときに米国のアマチュア無線家は“すごいんだなあ”と感心しました。あのよう

にずらりと並んで28MHzに出ているアマチュア無線局の信号を聞いたのは、後にも先にもあのときしかありません。

その後、1947年、アトランティックシティでWARCがあり、21MHzのアマチュア無線バンドが新設され、28MHzよりもよく飛ぶ21MHzにどっと移っていき、また、1951～1952年になると、サイクル18の太陽黒点もどんどん少なくなり、28MHzの信号が聞こえなくなってしまいました。太陽黒点の影響を実感しました。

## サイクル19とアマチュア無線再開

その後1952年7月、日本でもアマチュア無線が再開され、ほぼ同時期にサイクル19の太陽活動の立ち上がりが始まり、1956年、太陽黒点が100を超えると毎日のようにアルゼンチンLUやウルグアイCXなどと交信できるようになりました。

そして50MHzでも、1957～1960年ごろまで米国をはじめ地球の裏側と、955という真空管を使

図1 1610～2000年の太陽黒点(数)の年間平均変化のグラフ。ほとんど黒点がない時代もあり、そのころは冷害など多大な影響があったといわれている

